

海外作家賞はマリアン・ペナー・バンクロフト氏、国内作家賞は潮田登久子氏

第34回写真の町東川賞

第34回写真の町東川賞の受賞者が決まりました。海外作家賞はマリアン・ペナー・バンクロフト氏(カナダ・バンクーバー市在住)、国内作家賞は潮田登久子氏(東京都在住)、新人作家賞は吉野英理香氏(埼玉県在住)、特別作家賞は大橋英児氏(札幌市在住)、飛弾野数右衛門賞は富岡畦草氏(神奈川県在住)が受賞しました。授賞式は8月4日、農村環境改善センター、受賞作家作品展は同日から、受賞作家フォーラムは同月5日、ともに文化ギャラリーで開催します。

第34回写真の町東川賞審査会は、2月27日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞50人、新人作家賞59人、特別作家賞24人、飛弾野数右衛門賞34人、海外作家賞20人。より多くの方々からノミネートしていただこうと、推薦者リストの拡充をすすめており、ここ数年は、合計約160、170人の作家から5つの賞を選ぶ審査となっている。

対象となる作品も膨大な数になつており、今年も例年どおり8人全員の審査委員が午前中に写真集やポートフォリオなどをじっくりと閲覧し、午後から審査に入った。

今回の審査で、もっとも議論を重ねたのが国内作家賞だった。最終的に残った候補作家の中から膠着状態を破り決定したのが潮田登久子氏である。

近年出版された「みすず書房旧社屋」「本の景色」「先生のアトリエ」という3冊の写真集と出版記念写真展に凝縮された、20年以

上にわたって撮り続けている「本の景色」/ BIBLIOTHECA シリーズ」の深い説得力は、練り上げられたモノクローム表現のたまものである。本という紙のメディアが、写真という紙のメディアに表現されることによって、時間と空間が織り成す迷宮のような、果てしない魅力が浮かび上がっている。

新人作家賞は、石川竜一、片山真理、金川晋吾、細倉真弓、吉野英理香の各氏が最終段階まで残り、吉野英理香氏が選ばれた。

昨年最終段階まで残った写真集「NEROLI」と、同作に新作の「MARBLE」を加えた展示が対象となつての決定である。

一年という時を経て、いっそうの注目を集めたということは、新しさだけにとどまらない作品の魅力の証左でもあるだろう。

オーソドックスなスナップショットの技法を身体化しつつ、そこから限りなく自由であろうとする強く儂(はかな)くしなやかな吉野氏のまなざしは、瞬間と光

を紡ぎ、独特の世界を照らし出している。

特別作家賞は、北海道生まれで、自動販売機のある風景を撮り続けている大橋英児氏に決定した。

自動販売機は、とても身近でありふれたものだが、それだけにかえって意識して見ることがない。こうして作品化されることで、改めて出合う自動販売機はとて新鮮だ。

とりわけ雪の中の自動販売機は印象的であり、北海道生まれの大橋氏だからこそ見いだすことができたモチーフであるように思われる。

写真集「Roadside Lights」 「Being there」に編まれた自動販売機は、どこか懐かしくもあり、また日本の社会や文化を物語るものでもある。

2010(平成22)年に新設された飛弾野数右衛門賞は、ノミネート数もぐっと増え、賞が浸透するとともに激戦になってきている。また新しい賞だけに、毎年、

賞の性質も議論されているが、今年には戦後の焼け跡時代から東京を定点観測し続けている富岡畦草氏に決定した。

二代目富岡畦草・富岡三智子氏、三代目富岡畦草・鶴澤碧美氏へと引き継がれている定点観測は、記録の厚みと広がりが増し続けている驚くべき仕事であり、「長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者」を対象とする同賞の精神を体現するものもあるだろう。

海外作家賞は、楠本亜紀審査委員の入念な調査に基づいた説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のカナダ・バンクーバー地域からマリアン・ペナー・バンクロフト氏を選ばれた。

バンクロフト氏は、個人的な経験や家族史に端を発する独自の表現で、カナダにおける移民社会の歴史やファーストネーションについての聖地やテリトリーの意味を問いかけるシリーズなどを展開

